

## 第4回やまなし農村風景写真コンクール総評

審査委員長 白籟史朗

第4回を迎えた当コンクールは、今回応募総数597点、年々その数は増え、それに伴って、内容も充実、非常に優れた作品が多かった。四季における応募数は、春・夏・秋はほぼ同数であり、秋が若干少ないというところだった。だが、冬のみ非常に少数でただの17点しかなかったのは、少々残念な気がした。また、今回新設された「学生の部」も48点とまあまあの数であったが、規定である四切での応募はたったの数点のみで、他は小キャビネでの応募であったのは、少々残念であったが、それと同時に、その質についてもコンクールの本質を理解していないことは、今後大いに注意すべきである。但し、入選の2点の着眼点は秀逸であった。

さて、もっとも重要視される作品の質であるが、厳しく言えば、前回までの亜流めいたものが多く、またデジタル撮影による印画が3分の2を占めた。これらの多くは、デジタル撮影における安直さと、正規の発色でない印画のため、残念ながら、見るべきものは非常に少なかった。入選9点のうち、辛うじて4点が入選したが、上位の賞の中にはデジタル写真が7点中4点入り、銀塩写真は3点であったが、これは印画処理が非常に良好であったことによる。

全体的に見て、惜しくも落選した作品は、このデジタル写真による発色不良と特有の安直な撮影のため、画面にまとまりがないものが大多数であった。その点、銀塩写真で出品された方々の作品は、押し並べてしっかりした構図と発色であり、写真に対する情熱がうかがえた。しかし、こうした作者の作品であっても、一人一点の規定がある以上、どんなに好作品であっても外さざるを得なかったのは、誠に惜しいことであった。